

シンポジウム「SDGs×人文学」第3回「文学に探る」

川崎 賢子（文学科日本文学専修）

安岡章太郎「海辺の光景」における父母イメージの変容—老化と動物化

『海辺の光景』は老後性痴呆症と診断され、精神病院に入院させられた母親（チカ）が危篤になったために呼び寄せられた息子（信太郎）が、父（信吉）とともに死を看取る物語です。

従来の批評を背景に『海辺の光景』における、「老いの言説と表象」を確認しようとする、まず注目すべきは、これが戦後に発見された病であるということ。そして、アメリカにおいて先発した病であると語られていること。さらに、研究者として注目したいのは、チカの錯乱が狂気として捉えられていることの歴史性を批判しようとした評論、研究が少ないことです。

私たちにとって不可解なことですが、なぜ介護が「成熟と関係する営み」であると読まれてこなかったのか。それが問題だと思います。例えば男性、例えば息子が介護に行くかわり近代家族の中における役割分担を変更することが成熟につながるというような視点はほとんど見られません。老いと介護は生産と再生産の共同体としての近代家族に成因の役割の変更を突きつけます。ですが介護を母、嫁、娘が担う限りにおいては、その変更は可視化されずに飲み込まれていきます。

『海辺の光景』は高齢化社会のごく初期において老い、介護が家族の役割分担の変容を強いるさま、家族の欲望の構図を変更するさまを可視化しました。逆説的ではありますが、息子が介護を拒絶することで自我の独立、成熟のようなものを獲得したと、これまで指摘されてきました。しかし、これは批判的に検証されなければならないと思われま

す。文学の表現としては『海辺の光景』における薄笑い、狂気の笑いの機能を父母の権威のパロディー化から、さらに進めて検討することも可能です。父の動物化の表象、母の動物化の表象と合わせて近代家族における人間性の変貌と関わってくるわけです。死に瀕した母はこれまでとは異質な動物である亀のイメージに接近します。そこには老いと死の間の裂け目、死と再生の間の原初的な生命イメージも読み取れます。高度経済成長期の始めに発見され、当初狂気のカテゴリーに入れられていた老いは、現在の文学においては近代的理性を離脱する、いわば老人力として再発見されつつあるかもしれません。

中村 麻美（文学科英米文学専修）

ディストピアで多様性を考える

マーガレット・アトウッドの『オリクスとクレイク』では、人類を自然環境に対する害悪とする科学者クレイクが疫病を創り出し、人類を絶滅に追い込みます。数少ない生存者であ

るジミーは、クレーカーズと呼ばれる遺伝子操作された新人類の世話をします。ここで、小説におけるジェンダー表象に着目したときまづ問題となるのが、ジミーの歪んだヒロイズムです。ジミーは児童ポルノサイトで出会ったオリクスに恋愛感情を抱くと同時に、過去に人身売買された経験のあるオリクスを被害者としてしか見ようとしません。一方、オリクスはそういったシナリオに組み込まれることを沈黙や笑いを通して拒否します。SDGsのターゲット5には「全ての女性に対する暴力を排除する」とありますが、当事者の声だけでなく沈黙が語る物語を想像すること、また、問題を心理学化・個人化するのではなく、グローバルな権力のエコノミーを意識しながら理解することが重要と言えます。また、クレーカーズは新人類と呼ばれますが、現代社会のシスジェンダーや異性愛規範、また男性中心主義からそれほど逸脱した、「新しい」存在ではありません。

一方、オクティヴィア・E・バトラーの『種まきの寓話』は15歳の少女のローレン・オラミナが生まれ育った共同体の崩壊を生き延び、新たな自給自足の共同体を建設していく物語です。『オリクスとクレイク』で強調されている悲観主義的人類観とは異なり、『種まきの寓話』では、マイノリティにとって「世界の終わり」は既に起き、今も起こり続けているのであり、そういった人類の多様性を無視することの危険性が説かれています。未来は選ばれた人々だけのものではなく、混沌とした世界に適応し、他者の多様性を認めながら相互ケアを行う主体が創り出すものとして想像されています。

資源が限られている状況で人々が生き残るために環境と調和した社会をつくる、という意味でのプログラム構築は必須であり、SDGsもそういったプログラムの一つと言えます。同時に、構築された規範に対するオルタナティブを欲望し続けることも肝要です。「多様性を迎えよ。さもなければ滅びよ」。これは『種まきの寓話』からの引用です。プログラムの暴走を避けるためには多様性を確保し、そこから生まれてくるオルタナティブな欲望を活かしていくことが、ユートピア的实践と言えるのではないのでしょうか。

古矢 晋一（文学科ドイツ文学専修）

「災害ユートピア」における群集の表象—ドイツ語圏の文学と思想を例に

アメリカの著述家レベッカ・ソルニットは、災害直後に生まれる相互扶助的な即興の集団である「災害ユートピア」（「災害時に立ちあがる特別な共同体」）に社会的変革の新たな可能性を見いだしています。本発表では19世紀初頭に出版されたクライストの『チリの地震』、そしてゲーテの『イタリア紀行』を取り上げ、さらに理論的著作であるカネッティの『群集と権力』やソルニットも参照しているル・ボンの『群集心理』なども踏まえつつ、災害ユートピアという観点から、人間の集団としての群集が文学作品においてどのように描写されているのか、その特徴は何かということに絞って検討します。

『チリの地震』は地震という自然災害後の世界を舞台にしています。身分違いの恋をするジェローニモとジョゼフェは地震の混乱に乗じて町から逃げようとするのですが、その途

中で多種多様な群集に遭遇します。自然災害の後に生まれる群集というと、暴徒の集団をイメージしがちですが、この作品においてはお互いに助け合う集団も描かれています。『チリの地震』はすでに「災害ユートピア」と結びつけられて論じられることもあります。しかし小説の最後に二人は荒れ狂う群集によって無残に殺されてしまいます。お互いを助け合った群集が、あることをきっかけに他者を迫害する群集に移り変わる、その突然の変化、変身というものがこの作品で描かれています。

次に災害ユートピアと革命、カーニバルとの関連を確認するために、カネッティの『群集と権力』を参照しながら、ゲーテの紀行文『イタリア紀行』を取り上げます。『イタリア紀行』の後半部分ではローマの謝肉祭、カーニバルについての記述があり、これがまさに群集をめぐる考察となっています。ゲーテはカーニバルを、社会の不平等をつかま忘れることのできる自由の体験として捉えているのですが、同時にカーニバルの群集が危険と紙一重であることも指摘しています。このような群集における「自由と平等」という問題は、20世紀になってカネッティが『群集と権力』のなかで様々な観点から理論化しています。

ソルニットが提起する問いは、なぜ災害ユートピアがつかのま出現するのかではなく、なぜそれが普段の日常生活では抑圧されてしまっているのかということです。貧困や格差が日常的になっている通常の社会こそが災害であるという視点に立てば、災害ユートピアは政治的、社会的変革の第一歩にもなり得ると言えます。クロポトキンの『相互扶助論』なども踏まえたソルニットの考察は、さまざまな災害がグローバルに拡大している現在において、集団における「自由と平等」という問題を新たに考える上で検討に値すると言えるでしょう。

横山 安由美（文学科フランス文学専修）

『ベルサイユのばら』における主従関係とジェンダー

女子が男装して闘うという構図自体は手塚治虫の『リボンの騎士』にも見られますが、『リボンの騎士』はおとぎ話的な設定で、平安時代の『とりかへばや物語』のような側面を持ちます。一方、池田理代子の『ベルばら』のオスカルは大人の姿で書かれ、歴史上の実在の人物の間に埋め込まれることで、もう少しリアリティーを持った存在です。先日亡くなられた井上輝子先生の言葉によれば、世界でも類まれな性別役割分業意識の強い国日本において、剣を取って平等のために闘う、「生物学上の」女性を描いたこと。また従来 of 恋愛ものがキスですらも過激とされた中で最終的にオスカルとアンドレのセックスシーンが描かれたということ、この2点では確かに『ベルばら』はジェンダー表現的にも画期的な作品でした。

しかし『ベルばら』は宝塚で演じられて舞台化されていくうちに恋愛ドラマとして消費されていきます。典型的なロマンチックラブイデオロギーに取り込まれていくわけです。恋に落ちたマリーのセリフですが、「愛したい、愛されたいとほかのだれともおなじように身をふるわせて待っているひとりの女です。同じ女であれば、あなたにもおわかりでしょう」と

オスカルに叫ぶ場面があります。愛に生きることは女の本性であり、使命であるという強烈なメッセージがフランスの王妃から発せられてしまうと、これはもう誰も逆らえなくなってしまう。

さて、当時の女性読者の誰もが思ったのは、「アンドレが欲しい」ということです。決して威張らない、けがをすればやさしく手当してくれ、生活の面倒を見てくれるアンドレが欲しいわけです。実はそれは男性が妻を求める心理と同じです。なぜアンドレはここまで奉仕するかというと、従者という身分ばかりでなくオスカルを愛しているからです。ロマンチックラブの一番の体現者はアンドレであり、愛のために命まで捧げました。

しかしながら、しばしば愛には力関係や支配服従関係が巧みに組み込まれていて、服従を正当化する危険性があること、そして少なくとも日本ではこういう服従とか支配関係が実に巧みに隠蔽されているということにも意識的であり続けたいと思います。

野田 研一 (ESD 研究所・本学名誉教授)

自然という他者をめぐる想像力—エコクリティシズムから石牟礼道子へ

最近、「石牟礼道子の銀河系」というタイトルの論考を書きました。マクルーハンの『グーテンベルクの銀河系』のもじりです。どういう意味で石牟礼道子とマクルーハンが交叉するのかと申しますと、それはマクルーハンが「グーテンベルク」以前に存在したとする〈声の文化〉(oral culture)をたぶんに意識させるのが、石牟礼道子の『苦海浄土』だという意味です。『苦海浄土』という作品は声の氾濫する作品である。この作品はたんに声をめぐる物語ではなく、声そのものが氾濫する物語だと私は考えました。そして、いうまでもなく、氾濫とは「反乱」の意味でもあります。

具体的にいいますと、〈声音〉(こわね)を通訳するという場面が『苦海浄土 三部作』の最後の部分に出てきます。尾上光雄さんという水俣病の患者さんがチッソとの交渉の場すなわち東京に出てきて、会社との交渉が停滞した場面で、誰にもひとことも聴きとれない〈声音〉で語り始めます。彼の〈声音〉は言葉になってはいません。「あー、うー」といった表記でしか示せないものです。それを石牟礼道子は〈声音〉と名づけています。

やがて、尾上さんに付き添っていた奥さんが〈声音〉の通訳を始めます。〈声音〉に同調するかのように、夫の長く引っ張る〈声音〉に合わせるように、ゆっくりゆっくり静かに沈んだ〈声音〉で通訳するわけです。奥さんによる通訳は、言葉であると同時に〈声音〉なのです。水俣病患者の、意味を奪われた〈声音〉を聴きながら、その意味を回復する行為がこの奥さんの通訳行為です。これは『苦海浄土』という作品の本質を語るものではないだろうかと思えます。つまり言葉なき者の声を聴きとる、作家石牟礼道子の営みそのものを示すエピソードだと思えます。

私は『苦海浄土』というのは声の氾濫と申し上げましたが、その声は抑圧される者たちの〈声音〉にはかなりません。近代によって抑圧されるそうした〈声音〉を聴きとろうとする

行為こそが、『苦海浄土』という物語の核心ではないかと考えます。この作品で石牟礼道子は少年・少女から老人たちまで、さまざまな患者たちの（じっさいに）言葉にならない〈声音〉を聴きとり、それを聴きとり〈通訳〉するかたちで物語を創り出したのだと思います。同時に、そうした〈声音〉を聴きとることのできなくなった近代社会というものも浮き彫りになります。

石牟礼道子はあるインタビューの中で、「声音と言葉のあいだ」という言い方をしています—「私は言葉ではなく声音を表現したいんです。声のリズムとといいますか、声音は言葉になるのだろうかという思いが私にはあります」。自然を含むさまざまな存在の声と主体を奪ってきた近代、声の文化から文字の文化へと遷移した近代における、声の行方を問う文学—石牟礼道子の『苦海浄土』はそのような作品だと考えます。声とは他者の他者性の顕現にほかなりません。もちろん、他者とは人間だけではなく、自然もまたそのような他者性を帯びた存在です。石牟礼道子の作品は、ノンフィクションからフィクションまで、このような他者論的な問題がつねに私たちの前に横たわっていることを物語っているのだと思います。

パネルディスカッション

文学の中に見え隠れする SDGs との接点を求め、5つのテーマで開催された講演ののち、全ての講演者が意見交換を行うパネルディスカッションが開催された。参加者の発言を抜粋して紹介します。

横山 安由美

その後の少女漫画に新たな道を開いた「ベルばら」

『ベルサイユのばら』は、通常は日常を主題とする他の多くの少女漫画とは異なり、舞台を「革命」の中の戦いに設定している点で、少女漫画が抱えるステレオタイプから随分と外れているかと思います。

ほか、ベルばらにおいて私が画期的だと思っているのは、本作品では、それぞれの主要人物が親から自立しているという点です。普通、少女漫画の中で描かれる「少女」は親に従順な場合が多いのですが、ベルばらでは、みんな親に逆らって自立的に行動しているため、例えば、親との葛藤があったり、トラウマがあったりするのを克服するという構造が随所で描かれ、この自立性というものは、例え恋愛に取り込まれたとしても、その後の少女漫画に何か新たな道を開いたのではないかと思います。

古矢 晋一

災害ユートピアによって生まれる集団の「自然化」

災害ユートピアによって生まれる集団の「自然化」、「自然」との関係について。米国の著述家レベッカ・ソルニットは、自然災害だけではなく、人災や戦争など、広い意味での災害を対象にしている、例えばアウシュヴィッツにおける被収容者であるユダヤ人同士の利他的な行動についても著書のなかで論じています。つまり一般的な意味の自然が常に災害ユートピアで問題になっているわけではないということです。しかし「災害時に立ちあがる特別な共同体」という括りで、自然災害後の集団と戦争やホロコーストに際して生まれる集団を同一のレベルで論じてよいのかは慎重に検討しなければならないでしょう。

またソルニットはクロポトキンの『相互扶助論』なども参照していますが、「相互扶助」や「利他主義」という言葉は、哲学的にもいろいろな背景があるため、もっと多様な文脈から見ていく必要があるのではないかと思います。

中村 麻美

「未来をコントロールしようとするプログラム」

「SDGs」は、地球に残された限られた資源の中で、人類が今後生き延びていくために、17のゴールを設定し、それらを2030年までに達成しなければならないというプログラムですが、こうした視点で見ると「未来をコントロールしようとするプログラム」と呼ぶことができます。そういう意味で、「SDGs」が権威主義と結びつくことに対しては警戒する必要があります。

「未来をコントロールしようとするプログラム」は必要ですが、それが自己目的化して、個人を抑圧していく危険性を認識することも重要です。そういった危険を最小限とするために、個人の欲望を表現できるような場所を確保し、またその場所に多様性を確保することが求められます。つまり、誰もがアクセスできて声を上げることができる場所の創出、また、そこで何が声としてカウントされているのかを精査し続けることも同時に大切なことだと思います。

川崎 賢子

『海辺の光景』における比喩表現」

安岡章太郎の『海辺の光景』では、人物が動物の比喩で語られますが、家畜的動物と神話的な動物、あるいは寓意的な動物に限定され、野生動物が登場しない点は非常に興味深く、そこに戦後の職業軍人となった父の、父権の喪失であるとか、父の他者化あるいは父に対する軽蔑であるとか、そういうものが託されているという構図で、大変興味深いことだと思います。

また「古い」が、治癒しない「狂人」というカテゴリーに入れられていて、介護の第三者

化を問題にする場合に、介護の対象としてではなく、狂人として囲い込まれています。語り手である息子は母を自宅で看るのではなくて、病院に送り込んだということにあるやましさを抱えつつ、そこで親子の絆や母子の癒着を断ち切ったという形で、苦い自立を遂げたというふうにこれまでは評価されてきたというところがあると思います。そのため、そのような文脈のなかで、介護しないことが逆説的に成熟なのではないかと、読まれてきました。

野田 研一

「石牟礼道子と想像力」

石牟礼道子という作家は、ある種シャーマン的だと言われますが、『苦海浄土』という作品で表現したようなことができる条件とは何だろうと考えると、改めて、作家が人物を小説の中に登場させて、その人物を動かし、行動させていくという行為、すなわち書くという行為そのものの中に、この問題は含まれているのではないかと思います。それを私たちはたとえば「想像力」という言葉で呼んできました。『苦海浄土』が表現していることは、特異なことのようにもあるのですが、じつのところ、作家としてごくごく自明のことをしているだけかも知れません、作家は書くという行為を通じて、多様な他者に成り代わっている（＝変身）という現象です。私はそれを「想像力」と考え、そこで動いているメカニズムが何なのかを、もう少し考え続けてゆきたいと思っております。ちなみに、「変身」は自然と人間の関係を表象するきわめて重要な主題でもあります。